

学びの実践共同体としての高等学校

学校長 大谷 実

本校の伝統ある研究紀要『高校教育研究』（第64号）が刊行され、現下の高等学校が直面する諸課題に対して本校教員が継続的に探究してきた成果の一端を通して、関心を同じくする様々な方々と意見交流ができませんことを大変嬉しく思います。本紀要は、研究推進校としての役割を担うべく、本校教員が、広い視野に立ち、深い見識に根差し、わが国の高校教育の在り方に関して新しい知見を提示しようと取り組んできた努力の結晶であります。本紀要所収の論文が、各専門分野の進歩にいささかでも貢献でき、さらなる研究を触発する一助となりますならば、これほど喜ばしいことはありません。各論文に対しまして、読者の皆様からの忌憚のないご箴言やご批判を賜りますようお願い申し上げます。

本年度より、本校では「学校改善プロジェクト：互いに学びあう学校づくり」という新しい研究に着手いたしました。これは、教員どうし、生徒どうし、教員と生徒が互いに学びあう共同体を形成し、学校共同体の成員の一人ひとりが成長するとともに、システムとしての学校全体も同時に豊かになることを目指すものです。自主自律の校風、教師と生徒の温かな人間関係、真理探究に対する謙虚な態度といった本校の伝統を継承し、さらに充実・発展させつつ、若手・熟練教員、下級生・上級生、学年団、そして学校全体が豊かになるために、互いに学びあう学校をつくって行こうとしております。現在、「授業」、「進路指導」、「生徒指導」、「部活動」、「学校広報」という具体的な改善プロジェクトを立ち上げ、それに教員が主体的に参画しつつ、現状の課題を共有し、その改善に向けた方策を検討し、協働で取り組みつつ、その実践を可視化し省察しようとしています。規模が小さく、教員・生徒間の意思疎通が図りやすい本校は、本来的に学びの共同体としての基盤を有しており、本プロジェクトは本校の真骨頂を十二分に発揮する可能性を持っています。

「互いに学びあう学校づくり」という研究は、小学校や中学校においては比較的馴染みのあるテーマです。1990年の前後から、伝統的な教育モデルである徒弟制度における親方と弟子の関わりの研究に基づく「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation)、路上の露店で商売をするときに使われる計算方法を研究する「状況的認知」(Situated Cognition)、そして個と集団がともに発展する複雑なプロセスを研究する「創発的視野」(Emergent Perspective)など、認知心理学・社会学・民族学を包摂するアプローチと質的なデータを分析する方法論が興隆し、教育学の分野に影響を及ぼしはじめました。そして、授業を「共同体の実践」(Communal Practice)とみなし、「教室の社会的規範」(Classroom Social Norm)、「参加構造」(Participation Structure)、「教室談話」(Classroom Discourse)などの社会・文化的視点から研究することへと重点が移行してきたわけです。わが国でもそうした世の中の動向に機敏に反応し、教室や授業において「学びの共同体」が流行した時期もありました。

本校の「学校改善プロジェクト」は、高等学校での実践としては稀有であるように思いますし、授業のみならず学校活動全般にわたる取り組みこそが真正な「学びの共同体」の形成であるといえましょう。本研究は緒についたばかりですが、学校現場が直面する教員の世代間の不均衡や、独自の学校風土の継承・発展に鑑みて、その意義は大きく、今後の研究の展開に対しまして、皆様からのご高配とご鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。